

伊奈半十郎忠治と毛有の薬師堂

江戸幕府が成立し、徳川家康は重臣の伊奈備前守忠次に、利根川の流れを内海(東京湾)から外海の銚子へ換える「利根川の東遷」を命じました。

伊奈忠次は、此の大事業を息子の伊奈半十郎忠治に繋ぎ、伊奈家二代に渡りほぼ完成とした。

戦乱の世も終わり、徳川の世が安定期に入り始めた寛永年間(1624~1644)、関東郡代となった伊奈半十郎忠治は、洪水を防ぐための利根川の東遷とともに利根川支流の鬼怒川(栃木県日光市鬼怒沼)と小貝川(源流は栃木県那須烏山市曲畑)を分離しました。

そして取手市小文間の戸田井付近の台地を切り開き、利根川と合流する小貝川人工河口と、水海道で小貝川に流れ込む鬼怒川泥地の河川分離と人工河口の流路が完成し、小貝川は取手市利根町河口で、鬼怒川は守谷で利根川に合流させました。

小貝川は鬼怒川と切り離されることで川の流れが安定し、寛永7年(1630)には岡堰が設けられました。岡堰にためられた水が用水となり、相馬二万石と呼ばれる広大な新田が誕生します。

しかし、工事は現在のように簡単ではなく、多くの労力と様々な失敗を繰り返しながら行われ、勢いの強い水の流れを変えるために、萱と竹を使った独特の工法である「伊奈流」が苦労の末に編み出されました。昭和に入ってから、人々は堤防や堰の決壊時には、この伝統的な工法で「伊奈流」で危機を乗り越えてきた様です。

忠治、文禄元年(1592)~承応2年(1653)

関東三大堰(せき)

取手市を流れる小貝川対岸の、つくばみらい市に福岡堰があり、桜の名所にもなっています。以前は山田沼堰と言いました。

此の堰の下流に岡堰が設けられ、更に下流の利根町に豊田堰があり、関東三大堰と云われている。堰の役割は、用水路や排水路を開削して谷和原三万石(常磐自動車道谷和原インター)と、相馬二万石(取手市、守谷市、利根町)を開発して、江戸の食糧源となりました。

取手市毛有(けあり)、日清食品取手工場近隣の薬師堂は、伊奈忠治が眼病となったときに、岡堰用水組合の村々の農民が病気が治るとを祈って建立したと伝えられ、現在でも取手開発の功績者として厚い尊敬を集めています。



(写真、昭和27年頃の岡堰)

岡堰4本の用排水路

表郷用水路、小文間の戸田井橋で小貝川に合流
裏郷用水路、高須で小貝川に合流

西浦川、桜ヶ丘で北浦川に合流
北浦川、桜ヶ丘で小貝川に合流

五箇村用水路、北浦川支流

相野谷川、下高井から城根で利根川に合流

相野谷川は小貝川とは別流の一級河川です。

相馬二万石と大都市江戸

取手河岸から船積みされた、相馬二万石の農作物や鮮魚は、利根川を関宿迄上る船輸送か、または取手対岸の布佐や布施から馬による陸送でした。

特に布佐の「なま街道」は、鮮魚を翌朝には日本橋の魚河岸に届けた急行便で、利根鮭や鰻などは生きたまま競りにかけた人気商品だった様です。

取手では見かけませんが、我孫子市柴崎には「さば大師」が祀られており、江戸の本店が相馬霊場にお遍路さんを連れて来ていた様子が語られている。

明治23年利根川と江戸川が利根運河によって、短絡路が出来、関宿経由より一日早く水海道や土浦、銚子が近くなり、比例して取手も潤いました。

取手市下高井出身の廣瀬誠一郎は、此の利根運河開通のために、茨城県議を辞め自家の財産を懸けて利根運河株式会社を創立した偉人といえます。

「晩秋の取手町寺原と岡を訪れる散歩道」
毛有の薬師堂は、一般利用者向の公共交通機関が無く、非常に不便な場所です。

しかし、トイレや休憩場所、解散場所での交通機関などを考慮して8km程度で半日のコースが出来ました。更に秋の銀杏の紅葉時期を選び歩きたいと思えます。

常総線ゆめみ野駅出発8時30分、1700mさくら荘集合9時、表郷用水~3900m毛有の薬師堂伊奈忠治の碑(休憩)~2300m東漸寺と目隠し銀杏、県重文の山門の東漸寺で解散12:30の予定です。、西取手駅迄案内700m。

熊倉

伊奈半十郎忠治(ただはる)

誕生 文禄元年(1592)
死没 承応2年6月27日(1653/7/21)
別名 半十郎(通称)
戒名 長光院殿東誉栄源周居士
墓所 埼玉県鴻巣市の勝願寺
幕府 江戸幕府関東郡代
主君 徳川秀忠↓家光↓家綱
父 伊奈忠次

武蔵小室藩主、伊奈忠次の次男。通称名半十郎。勘定方を勤めていたが、父の没後、跡を継いでいた兄忠政が元和4年(1618)に34歳で若さで没した。

しかし嫡男忠勝が8歳の幼少であったため、家督は忠勝が、関東代官職は27歳の忠治が継ぐこととなった。

関東代官となる前から幕府に勘定方として出仕しており、武蔵国赤山(現、埼玉県川口市赤山)に既に七千石で赤山城を拝領していたため、兄の配下だった代官の多くが忠治の家臣となったという。

忠治は父、兄の仕事を引き継いで関東八州の治水工事、新田開発、河川改修を行い、荒川開削、江戸川開削に携わった。

江戸初期における利根川の東遷事業の多くが忠治の業績であり、鬼怒川と小貝川の分流工事や下総国、常陸国一帯の堤防工事などを担当した。

なお、この業績を称えて忠治を祀った伊奈神社が、桜の名所である福岡堰(現、茨城県つくばみらい市北

山)の北東、つくば市真瀬にある。

また、合併してつくばみらい市となった旧筑波郡伊奈町の町名は忠治に由来する。

伊奈部落名は現存します。

父の忠次も埼玉県北足立郡伊奈町の町名の由来となっており、親子二代で地名の由来となり珍しい例であり意味深い。

なお、忠勝は翌年に9歳で病没し小室藩は無嫡廃絶となるが、名跡(みょうせき)としての伊奈氏は忠政次男の忠隆が継いでおり、忠治は傍系である。

「関東郡代」という職名の正式な設置は寛政4年(1792)であり、当初の関東郡代は忠治からの代々に自称されたものとみなされている。

忠治の業績

元和年間(1615~1624) 吉見領圍堤：武蔵国吉見領(現、埼玉県比企郡吉見町)

寛永5年(1628) 中山道の移設による大宮宿の形成、
・氷川参道西側に街道を付け替えて宿や家を街道沿いに移転させ、現在に至る大宮の町の基を創る。

寛永6年(1629) 荒川瀬替え

・武蔵国久下〜川島(現、熊谷市〜比企郡川島町)
寛永6年、見沼溜井、八丁堤

寛永6年〜寛永7年(1630)、鬼怒川と小貝川の分流

寛永7年、新綾瀬川開削

・武蔵国内匠新田〜小菅(現、東京都足立区)
寛永12年(1635) 江戸川開削

・下総国関宿〜金杉(現、野田市)〜埼玉県北葛

飾郡松伏町)

寛永12年、佐伯渠(きよ、茨城県五霞村小手指)正保元年(1644) 北河原用水

・武蔵国北河原(現、埼玉県行田市)

一部小説では玉川上水工事の二度の失敗の責任を取り切腹したことになっているが、切腹はフィクションです。忠治の意見に対抗する請負人に邪魔者扱いされていたみたいです。



鴻巣駅徒歩10分、古刹勝願寺境内の忠次と忠治の墓石。

2015年桃の節句、撮影 熊倉

伊奈忠次と利根川の東遷も伊奈家三代目で谷原五万石が三大堰の完成によって生まれました



利根川の東遷も伊奈家三代目伊奈半十郎忠治になる。父忠次の後継人として、江戸の食料源谷原五万石を築く。寛永七年(1630)小貝川に三大堰を設け、小貝川と鬼怒川の分離と共に、灌漑用水を設けて相馬二万石が誕生。忠治は、相野谷川とは別に六本の用水を開削した。これらの用水は一部取水口を変更してはいるが、田植えの時期には水量を増し、現在でも活用されている。

取手市内の山王と寺田は、水争いが昔から続き、仲が悪かったという。山王出身の人気俳人「ホトトギス4S」のひとり、高野素十は、この争いを句に残している。

水喧嘩 徳川の遠に さかのぼる



表郷用水幹線と薬師堂

今回のウォーキングは、岡堰の小貝川から分流する、表郷用水幹線を国道6号の手前にある毛有の薬師堂を目指します。地図の用水路は、現在では様子が若干違いますのでご容赦ください。

表郷用水幹線は岡堰から水路が二本に分かれて描かれています。今回は利根水支線を歩きます。よく見ると相野谷川とクロスしています、川がクロスとは、どういうことでしょうか。

県道130号沿いの宗仁会病院の脇です。

表郷用水幹線は、常磐線を超えて光風台団地の脇道と並行して、一直線に小文間の台地に突き当たり東へと戸田井橋の袂で小貝川に合流し用排水の役割を終えます。

上図の用水路による新田開発で、「相馬二万石」と言われる穀倉地取手は、つくばみらい市の「谷和原三万石」と合わせて、江戸という大都市の食糧産地になり大きく発展しました。

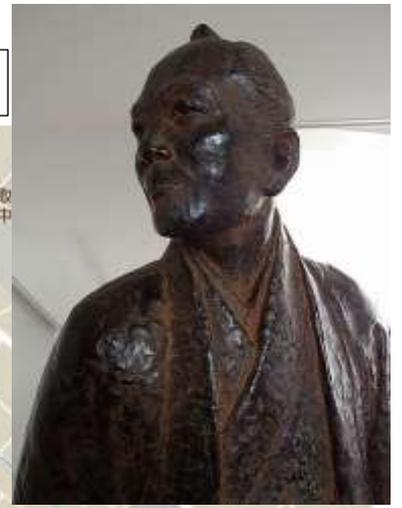


相野谷川と寺田橋



毛有薬師堂

伊奈忠治像



東漸寺解散から帰路、西取手駅またはJAとりで総合医療センター